大月人物伝 歴史探訪

カリフォルニア州立大学名誉教授
雨宮　永次

■憧れのアメリカへ

通訳の仕事を通じて英語力を高めた雨宮は、次第にアメリカに留学したいと思うようになった。

その彼にまたとない朗報が突然舞い込んだ。茨城キリスト教大学のアメリカ人教授がある日、彼を研究室に呼び、アメリカのペパーダイン大学への留学を勧めるとともに、行く気があれば準備を整えてやると言ってくれたのだ。

大学への入学手続きを行い、奨学金と渡航費を大学が出してくれるように申請してやると言うのである。

雨宮は迷うことなく留学を決断し教授にすべてをお願いした。

幸いこの申請は認められ、雨宮はいよいよ憧れのアメリカに留学することになった。これは、彼の優れた能力と人間性が教授に認められたからにほかならない。

しかし、留学には母親が反対した。彼女にとって、大事な我が子が異国に渡ることなど危険きわまりないことと思えたに違いない。

それでも行かしてくれ、と頼む息子に母は言った。

「だったら行ってもいい。だけれど親の顔に泥を塗るようなことはしないように。それに困ったらいつでも帰っておいで」と。

母のこの言葉で留学は決まった。昭和二十五年五月のことであった。

■博士の学位をとる

ペパーダイン大学に到着した時の雨宮の所持金は、わずかに二十五ドル。これから四年間、授業料は奨学金で払えるが、生活費は稼がねばならないのだ。早速アルバイトを始めた。

まず最初は、大学の校庭の花の手入れや掃除をする雑役係、それから教会の用務員、製紙工場の工員などいろいろな仕事をした。

アルバイトは授業の合間をぬって毎日四時間勤務だから大変だった。しかし、何とかこれに耐えて必死で勉強し、大学を卒業する時は何と優等生に選ばれた。

続いて南カリフォルニア大学大学院に進学したが、ここでは難しい奨学生試験に合格したためより多くの奨学金がえられ、大学の非常勤講師にもなれたのでバイトの必要はなくなった。

大学院ではまず修士課程を順調に終え、続いて学界への登竜門となる博士課程に進んだ。目標は博士の学位取得である。

この目標達成のためには、まず授業を受けて必要な単位をとり博士論文を書いて大学に提出しなくてはならない。

ところが、この博士論文というものは大変な難関である。今までの社会学研究でまだ明らかにされていない事実を明らかにしなければならないからである。

雨宮はこの難関に果敢に挑戦した。そして、長い歳月をかけて資料収集と分析を繰り返し、ついに論文を完成した。

学位授与式の日

論文は教授たちに審査され、そのあとで内容について複数の教授の前で口頭試問を受けなくてはならない。教授たちの質問は鋭い。

しかし、雨宮はこれらに合格し、ついに昭和三十七年に南カリフォルニア大学社会学博士の称号を手にしたのであった。

■大学教授となる

大学院時代から雨宮はすでに大学で非常勤講師をしていたが、最終目標は大学教授となることであった。そのためには、講師から助教授、准教授そして教授へと三段階を超えなければならない。特に教授へのハードルは高い。

そこで彼は寸暇を惜しんで研究を続け、論文を発表し、幸いにサンノーゼー市にあるサンノーゼー州立大学で昇進のチャンスをつかんだ。

この大学はカリフォルニア州立大学の一つで名門校である。ここで彼は教授への三段階をクリアーし、終身在職権をえることができた。

それは厳しい審査をへての結果であったから、喜びは大きかった。渡米以来、彼の生活は苦闘の日々であったが、今教授となった瞬間にすべては報われたのである。

■有終の美を飾る

州立大学教授としての雨宮は誠心誠意教育に打ちこんだので、同僚の評価は高かった。彼は、優れた教育者であると同時に、どんな任務も引き受け、決して不平を言わず、怒らず、誰にも親切にする人格者、と評価されたのである。

研究面では社会学の中の犯罪学の分野で業績をあげ、社会学科長に任命されてその職を五年間務めた。

これらが要因となり、定年退職する際は模範教授として学部長から絶賛された。

名誉教授の称号も授与され、雨宮は大学人としての有終の美を飾ることができた。

家庭人としての雨宮は数学博士の女性教授と結婚し、幸せな家庭を築いた。子どもには恵まれなかったので日本の孤児二人をアメリカに引き取り、愛情こめて育てた。二人は立派に成人し今アメリカ社会で活躍している。

雨宮は現在八十一歳。アメリカの国籍をとり、アメリカ人となって久しい。南カリフォルニアのサンディエゴで海の見える絶景の丘の上に居を構え、悠々自適の生活である。

とは言え、愛する夫人に先立たれてしまった今は限りなくさみしい。彼女なくして今日の自分はなかったとしみじみ思いながら、雨宮は感謝の祈りを日々ささげていると言う。

執筆者　大石五雄
（猿橋町在住）